

すぎなみコミュニティカレッジ

講座『実践に学ぶ！学校サポートのコツ』

事例発表：生徒の発想で創り上げた「山辺ドリーム大学」

～長野県松本市立山辺中学校における「総合的な学習の時間」の取組

発表者：松本市立山辺中学校教諭 小室 邦夫氏

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、山辺中学校の小室と申します。今朝、松本はマイナス4度でありまして、コートを着て来ようと思ったのですが、阿佐ヶ谷の駅に降りましたら大変に温かくて、もう4月中旬の気候だというお話を伺いまして、東京は温かい所だと改めて感じました。私も28歳までは板橋区の会社に勤めておりまして、それから長野県に行って教員になったわけですが、まだ40代に入ったばかりの未熟者でございます。また皆様からいろいろご指導いただければ有り難いと思っております。

平成11年に、私が選択社会科の授業を担当いたしまして、松本市の農業問題について学習をしていきました。松本市は人口が20万人で市内には15の中学校があります。私が勤務しております山辺中学校は生徒数が324名から、現在は300名とだんだん減ってきております。その選択社会科の生徒は3年生ですが、松本市の農業問題を勉強しているうちに、実際に中学生が「ぜひ、実際に農業をしている人たちの苦勞や生き方についてお話しを聞いてみよう」ということになりました。インタビューの結果、松本駅周辺が活性化を狙っているということが分かりました。皆様もご存じのように、松本市のど真ん中には松本城がありまして、毎年130万人の観光客が訪れます。しかし、平成13年から減少し始めて、現在は80万人台にまで減ってきています。

松本駅前の活性化のために松本駅前の商店街の人たちが、駅前で土曜日の午前10時から午後3時まで、少し安くお土産を売っています。同時に、松本市の農業をしておられるおばあちゃんを中心とした松本農村女性協議会という団体がありますが、そういった人たちも、松本の農産物が売れるようにということで、駅前商店街の人たちと一緒に販売をされています。そこへ中学3年生の生徒15名が行きまして、一緒に野菜を売る体験をしました。彼らは農業体験はありません。はじめてセロリやナスなどを売る体験をしたわけですが、「モノを売るということは自分の真心と笑顔を売るということだと感じた」という感想をもらいました。そして、生徒が明るく大きな声を出した分だけ、お客さんが次々と集まったと。朝10時から午後3時までの販売で、70万、80万円もの収益を上げたわけですが、この商業体験を通して、彼らは農業は高齢化が進んでおり、後継者不足が問題になっていることを発見します。

そこで今度は、学区内の一人暮らしの老人達の所を訪問し、実際にどのような生活をしているのか、また生き甲斐は何なのかを聞きました。さらには平成12年の1月14日に、一人暮らしのお年寄りやお年寄りのご夫婦を学校に招きまし

て、民生委員の方の勉強会も兼ねて、松本市の高齢者問題について一緒になって学習をしました。

ところが、私は、社会科の、単なる資料から得た高齢者問題ということなら分かるのですが、行政面においても、もっと裏付けられた、実際の高齢者の生き方については分かりませんので、松本市の高齢者福祉課の係長さんをお招きして、その方に授業をしていただきました。しかし中学3年生ですから、3月に高校入試を控えておりまして、「先生、どうしてこんな入試前の時に、私たちからすれば60年も70年も先の高齢者問題をやらなければならないのか」ということで、一部の生徒は授業には乗り気ではありませんでした。その時、87歳の一人暮らしのお年寄りの方が、そんな不安そうな生徒の顔を見て、「君たちはまだ若いから分からないかもしれないけれど、私は今87歳で、一番悩んでいるのは、これからどんな介護が受けられて、どんな死に方をするかだ。君たちはまだこれから長生きできる。周りに惑わされず、堂々と生きなさい」とおっしゃったのです。6畳のアパートに一人で生活をされている、このお年寄りが、このように切々と訴えられました。それを聞いた村上君という生徒がハッとして、「高齢者の方は、もっと寂しい生き方をしておられるかと思っていたら、まったく反対で、自分のことが小さく感じられた。あのおじいさんがおっしゃるように、周りに惑わされることなく、自分らしく堂々と生きたい完全燃焼したい」と言いました。

ところで、その頃、松本には四年制の大学がありませんので、地元の企業が誘致して大学を作ろうという話が浮上してきました。そのときに、選択社会をとっていた、ある一人の生徒が「先生、社会科で高齢者問題をやってきたけれど、ああいう地域の方をお迎えして、地元の方を講師にして勉強すると、もっと深い学習ができるのではないか。この学校の中に地域の皆さんが気楽に来て、誰でも一緒に学習できるような大学が出来るといいね」と言ったのです。さりげなく言った生徒の一言でした。

そして平成12年の2月になると、子どもたちが、自分たちが学んだことを地域に還元したいと考えるようになってきました。また、高齢者の方々を学校に迎えて授業をしたことが新聞などのマスコミに取り上げられたことをきっかけに、地域の方から学校に電話がかかってきました。「地域の方が学校に行って授業をするのは良いけれど、学校に行けないお年寄りや地域の人もしらっしゃる。だから、もっと学校と地域が一緒になって、さらには中学生の方が地域に出かけて行って授業をすることはできないだろうか」というご提案をいただきました。私は、正直それは無理だと思いましたが、選択社会科を受けている15人の生徒に、そのことを投げかけてみたのです。

「君たちは大学を作りたいと言ったけれど、逆に君たちが地域に出かけて行って地域の皆さんと一緒に学習をしないかという提案が来ているがどうするか？」と。すると、彼らは受験を控えた時期なのに、授業が終わった後30分、40分かけてディスカッションを3回、4回と繰り返していきました。そして「ぜひ、やりたい！」と言いだしたのです。

それではどこでやるか、が問題になったわけですが、地域には公民館（こちらではコミュニティセンターでしょうか）があるから、そこで、彼らが学んだことを、その成果を発表し、一方、地域の皆さんは彼らの発表を聞いて意見交換を行い、その結果を中学生なりに再度まとめてゆくという、そういう学習を展開しました。

中学生たちが講師として授業をする中で、地域の方々からいろいろな質問を受けましたが、自分たちでも、地域に出かけて行って授業を計画すること、そして地域の皆さんと一緒に、それが出来るのだという自信が生まれました。

一つの冒険であったわけですが、この成果から、私は、13歳から15歳の中学生でも、そういう学ぶ場を与えたり、何か一つの学習活動を計画させ、実現させる責任感を与えていくことが可能であるという確信を得ました。もちろん失敗もあると思いますが、失敗を恐れるよりも実行することを大切にしたいわけです。

この後、また地域の方から学校に電話がかかってまいりまして、PTAと学校の距離は近いけれど、まだ地域と学校との間には大きな距離があるとの指摘がなされました。そして、一般の地域住民と学校が一緒になり、これから新学習指導要領、そして総合的な学習の時間が始まるけれども、そういったことに対するディスカッションの場を作ってもらえないかと要望が出されました。そこで、またこれを生徒に投げました。しかし、これは学校全体に関わることで、クラスのルーム長・副ルーム長を集めて審議にかけました。その結果、「自分たちの生活を見ると、朝学校に来て、授業が終わると塾へ通うという、自宅と学校と塾の3カ所だけで1学期、1年が過ぎてゆく。しかし、こういう話し合いの場を作ることで、自分が地域に住んでいるという自覚も生まれるのではないか」という結論に達しました。そこで平成12年の6月3日、一般の地域住民とPTAの代表者と、そして生徒代表、学校職員代表が集まり、『学社連携推進会議』なるものを発足させました。学校と地域が連携をしようという主旨で、45名の方が集まりました。その席で、私たちは、こういう総合的な学習の時間を展開したいこと、また生徒の企画による大学設立を目指していることを発表したのです。この会議は年3回行われましたが、その進展の中で、生徒たちは早急に大学を作りたいと考えるようになっていきました。では、まず、どのような勉強をするのかについて、当時の全校生徒324名にアンケートをとりました。さまざまな案が出ました。釣りとか料理とか趣味的な案もありましたが、それらはひとまず横に置き、ひとつのテーマの元で、地域住民と中学生が一緒になって学習したり体験学習が出来るように考えました。中学生たち自身も考え、地域の方々には回覧板に「こんな学科を作ってほしい」という要望を記入していただいたり、あるいは、こういう講師がいるという、自薦他薦を問わず、ご紹介いただくようお願いもしました。

その結果、43の学科の案が出たのですが、これでは多すぎて成立しないということで、さらに生徒が話し合って最終的には17の学科になりました。中国語学科とか地質学科とか環境学科など、さまざまな学科です。パソコン学科もあり

ます。

次に講師をどうするか、ということで、これも生徒たちが各地域で講師募集を行い、さらに地域の皆さん、ぜひ学校へお出てくださいという呼びかけのチラシも作りました。学校のある地域には4,351世帯がありましたので、生徒一人当たり15枚程度を担当した計算になります。4月29日から5月6日のゴールデンウィークの時に、1軒1軒歩いて配りました。そして平成13年の6月11日に『山辺ドリーム大学』の開校にこぎつけたのです。

その時の講師は15名、受講者は148名でした。年間10回、授業は午後2時30分から4時10分までの100分授業です。中国語学科では、中国語の基礎を学ぶだけでなく、全員で中華料理を作ったりといったようなことも行いました。各学科の学科長も副学科長、もちろん学長さえも生徒です。生徒自身が大学を運営するという形です。地域講師の方は10回分のカリキュラムを作るわけですが、その連絡・調整役を、最初は私がやりましたが、慣れてきたところで生徒、つまり学科長が中心となって進めていくようになりました。

そして、平成13年の12月15日、無事に山辺ドリーム大学の第一回目の終業式を迎えることができました。その壇上には15名の地域講師の方々が並び、学科長からお礼の花束を贈呈しました。また会場には受講生だけでなく地域の多くの方々にご参加いただくことができました。その場で、ぜひ来年も多くの方々に入學していただくよう呼びかけを行ったわけですが、その時、一人の地域講師の方がこうおっしゃったのです。「私は初めて学校に足を入れました。学校というのは非常に敷居の高いところです。学校でどのような教育が行われているのか、どんな中学生がいて、どんな問題で悩んでいるのか、最初は分からなかったけれども、一緒に学習する中で、いまの中学生が何を考えているのかが分かった」と。

町づくりとか地域の向上と言った場合、学校はその拠点でもあるし、地域の中の一つの学舎です。地域住民と中学生と一緒に体験学習を行うことによって、コミュニケーションが深まります。また、13歳の子どもから、上は90歳の受講生もあり、そういう幅広い年齢層の中で、お互い支え合ったり助け合ったりする、そういう豊かな人間性や感性も身につけていったのではないかと、思います。

お手元のレジュメの中に、「平成14年度 山辺ドリーム大学受講生数一覧」がございますが、そこにどのような学科があるかが載っております。たとえば、パソコン学科では、地元セイコーエプソンというIT企業がございまして、その社員の方が講師を引き受けてくださいました。また、手話点字学科では地元のNPOの方とか社会福祉協議会の方などが講師を務めてくださいました。

講師の方々は、民間・企業を問わず、すべて地元の地域の方々ばかりです。年10回の講義はほとんどボランティアのような形でやってくださいました。

平成14年度は地域講師の方の数が15名から28名に、受講生数も148名から282名まで増加し、多くの成果を得て、無事12月7日に終業式を終えることが

できました。

この学習を通して、生徒や地域の方々から様々な感想が寄せられました。私たちが感じていること、また、いま中学生が何を学ぼうとしているのか。与えられた一つの学習問題を解いていく基礎学力も大切ですが、地域の課題などを発見し、その問題解決を行うときに、地域にいらっしゃる専門家や団体の方々から教えを受けながら、地域の方々と一緒に学習をしていく中で、幅広い人間性が身についていくのではないのでしょうか。モノの見方や考え方も確実に広がっていきました。また、町づくり・地域興しという点でも、ひとつの成果につながったのではないかと考えます。教育の機会が広がったということだけでなく、高齢者問題を一つの例として、地域に対する責任感とか誇りなどを身につけながら、問題解決能力も高めることができたのではないかと思います。

しかし、まだ課題も数多くございます。28名の講師の方々为学校に来てくださいます。また、受講生の方だけでなく、どのような授業を行っているのかを見学に、400名近い地域の方々もお出でになります。そこで安全管理・危機管理をどうするか、といった問題も残っているのは事実です。この山辺ドリーム大学は中学生の発想から始まったものなので、彼らの意思を尊重するために運営も彼らに任せています。しかし、私たちとしては、生徒たちにどのような力をつけてあげることができたのかを考える必要があります。

山辺中学校では“六つの力”を定めております（後述の参考資料 - 2 参照）。そこで地域講師の方々には、中学生にこういった力をつけるよう指導してくださいとお願いをしています。また、地域の方々には、こんな観点で中学生と接していただきたいというお話もしてまいりました。最後に、授業の模様をビデオでご覧いただきたいと存じます。

<ビデオ：「山辺ドリーム大学」を紹介したテレビ番組>

以上で、私どものドリーム大学の取組に関しては、ご理解をいただけたことと思います。こういった試みは、松本市だけでなく、北九州市など他県でもさまざまな取組がなされています。学校と地域が連携しながらたくましい子どもを作りたいという願いであります。まだ始まったばかりで未熟な点多々ございます。皆様からのご意見やご要望などをいただければ有り難いと存じます。つたない体験談でございますが、ご静聴いただき、ありがとうございました。

〔参考資料 - 1〕 平成14年度 山辺ドリーム大学受講生一覧

学科名	生徒数	地域受講生	合計
1. ゴスペル学科	11	14	25
2. 囲碁学科	21	10	31
3. 演劇学科	23	1	24
4. 温泉観光学科	18	6	24
5. 環境学科	18	3	21
6. 郷土文化学科	12	12	24

7. 健康学科	15	8	23
8. 山辺史跡学科	25	10	35
9. 手話点字学科	17	15	32
10. 地質学科	19	3	22
11. 中国語学科	27	10	37
12. 陶芸学科	15	26	41
13. 日本文化学科	17	6	23
14. 飛行学科	29	2	31
15. 福祉学科	19	3	22
16. 平和教育学科	12	3	15
17. パソコン学科		61	初級
パソコン学科		47	中級
信州大学生		32	
合計	298	282	580

〔参考資料 - 2〕総合的な学習の評価のあり方について
 - 評価基準と具体的な評価基準 -
 評価基準 具体的な評価基準

問題解決能力

1. 自分で課題を選んだり、見つけたりすることができる。
2. 学習活動の見通しをもち、解決に向けての学習計画をたてること
 ができる。
3. 計画にもとづいて解決をすることができる。
4. つまづきや困難なことが生じたとき、計画を修正したり、工夫をして解
 決に結び付けることができる。
5. 探究及び解決の過程や結果を振り返り、検討をしたりよりよいものにし
 ようとすることができる。
6. 学習の結果を、生活や教科をはじめ他の学習活動や分野に生かすことが
 できる。

学び方や考え方

1. 目的にあった情報を選択したり、収集したり、処理することができる。
2. 必要なことを調べたり、不明な点や困難点を解消する方法も見いだすこ
 とができる。
3. 解決やまとめの作成の過程を、作品や報告書などに効果的にまとめるこ
 とができる。
4. 自分の解決や作成の過程及び結果について、わかりやすく発表すること
 ができる。
5. 自分の解決や作成の過程及び結果について、討論し、考え方を深めた

り、学びあったりすることができる。

主体性や創造性

- 1．主体的に解決のための学習活動や探究活動に取り組むことができる。
- 2．課題意識や目的意識をもって、主体的に、粘り強く取り組むことができる。
- 3．課題解決のために、工夫したり、新たな考えを取り入れることができる。
- 4．自分や友達について、考えや工夫したこと、よさなどを自覚したり、認めたりすることができる。

生き方

- 1．自分の興味や関心のあること、また将来についての希望を自覚できる。
- 2．自分の得意なことやよさなどについて、自覚できる。
- 3．自分の希望やしたいことの実現に向けて、積極的に行動できる。
- 4．自分の考え方や行動について、振り返ったり、よりよくしようと努力できる。
- 5．友達の考え方や行動から学び、自分に生かそうとすることができる。

自己表現力

- 1．地域の方や他の生徒と一緒に、意見交換や話し合いをすることができる。
- 2．発表会や交流会のときに、自己の考えや感想を堂々と伝えることができる。
- 3．自己の考えを多くの人とかかわらせながら、コミュニケーションを図ることができる。

豊かな感性

- 1．地域の人々の交流や体験活動で、互いのよさを認め合ったり、励ましあったりすることができる。
- 2．自分から気づいて行動をおこしたり、心を寄せ合うことができる。

以上の25項目を評価基準とし、学年ドリーム、全校ドリーム、山辺ドリーム大学の学習活動から、自己評価と教師側で評価をする。